

# 小学校におけるアクティブラーニングの実践的研究

## —学級通信を媒体とする教授活動を焦点に—

木村 学\*

本稿は、学級通信を活用した授業実践の分析を通して、小学校におけるアクティブラーニングの実践の方略を提示することが目的である。調査対象は、東京都公立小学校4年生のクラスであり、年間を通して10回の参与観察を行った。2つの理科の授業を抽出し、分析を行った結果、徐々に子どもたちの授業外活動が活発になり、それに伴い授業内容が子どもたちの活動を起点として展開されることが確認された。具体的には、子どもたち自身の日記に基づく学級通信を活用することで、子どもたちの興味・関心が高まり、授業への集中度と授業外活動への主体的な取り組みが保障されていることが明らかになった。つまり、子どもたちの授業外活動とそれら膨大な日記の記録こそ、学習主体性の証拠であると解釈することができる。そして、これらの授業構成を支えているのは反転授業の様式に似た授業外活動の活性化であり、その装置として学級通信が機能していることが明らかになった。

**Key words** : 小学校, 学級通信, アクティブラーニング, 反転授業

### 1. はじめに

小学校教師・D先生の授業は、教師からの発問を起点とする教師主導型で展開され、子どもたちへの厳しい叱責も飛ぶ授業である。一見すると子どもたちに学習主体性は見られず、教師と子どもたち相互による協同的な学習スタイルともかけ離れた実践に見える。しかし、それにもかかわらず子どもたちの様子からは、「授業をやらされている」という雰囲気はない。例えば、子どもたちはD先生の一举一動を注視し、発問がなされるとすぐさま挙手をして答えるのである。つまり、子どもたちの授業に対する集中度が非常に高く、授業についていけずに学習を放棄しているというような子どももみられない。

このような教師主導型の「導入—応答—評価」という授業展開に見えるD先生の教授活動にお

いて、そこに子どもたちの学習主体性が確立されていると考えられるのはなぜなのだろうか。それは、授業中に活用される学級通信に鍵があると思われる。学級通信のなかに学習題材として、子どもたちの日常生活の知的な気付きや発見が盛り込まれることによって、子どもたちの興味・関心が高くなっていくのではないだろうか。例えば、子どもたちが放課後の遊びで発見した生き物や、地域の面白い出来事などが学習題材に取り上げられるのである。それらの題材をもとにクラス内に情報が共有され、他の子どもたちにも追体験されていく。仮説としては、このような授業プロセスを通して、授業の学びと授業外の学びが相互に繋がっていきと考えられ、そこに子ども主体のアクティブラーニングが成立していると考えられるのである。

以上、学級通信を活用したD先生の授業実践

\*人間学部児童発達学科

を明らかにすることによって、小学校におけるアクティブラーニングの実践的方略を提示したい。

## 2. 小学校におけるアクティブラーニングの課題

### 1) 「生きる力」の育成からアクティブラーニングへの変遷

アクティブラーニングの実践としてどのような実践が求められているのか、近年の学習指導要領の変遷をたどりながら整理してみよう。まず大きな転換点としては、2002年から実施された学習指導要領の改訂を挙げることができよう。いわゆる「ゆとり教育」からの改善として、「知・徳・体」をバランスよく育む「生きる力」の育成が掲げられた。その具体的な変革の一つとして、「総合的な学習の時間」が新設され、体験学習や問題発見課題解決学習が重視されたのである。しかし実際の教育実践においては、児童の基礎基本の育成が十分でないとの批判も多かった。

そうした批判への改善も含め、2008年に新たな小学校学習指導要領が公示された。例えば改善の一つとして、小学校学習指導要領解説総則編では教育課程実施上の配慮の筆頭に「児童の言語環境の整備と言語活動の充実」が提示された（文部科学省2008）。そこには「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」が重要だと示されている。さらに「総合的な学習の時間」においては、具体的な言語活動の充実として、「問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われること」が重要だという。このように探究活動のなかに言語で分析しまとめたり表現したりするという言語活動の方略が提示されることは、子ども主体の探究活動がはいまわる経験主義等と批判されてきたことを払拭するためには重要な観点であった。後述するように、本稿の分析対象である学級通信の活用は、体験と言語活

動を繋ぐうえで、有効なツールと考えられるのである。

こうした教育改革の延長に、2020年から完全実施された学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）として、学習者の能動的な学びが求められることになったのである。しかし、学習者がこうした実践を通して学習内容を深く理解できているのか、そもそも実践者による形だけのアクティブな実践に留まっているのではないかという指摘もある。

### 2) 実践事例の現状と課題

文部科学省の2018年の調査によれば、世界の多くの国々では、ながらく各教科領域に固有な内容の習得を中心に学校教育が行われてきており、世界的な動向として汎用性のあるコンピテンシー、スキル及び資質・能力をいかに育成すべきかという教育政策や教育改革が積極的に推進されているという。そうした改革の一つである「総合的な学習の時間」も、全面実施される前から学力低下の問題がとりざたされたりした。一方で、全国学力・学習状況調査の分析では、「総合的な学習の時間」で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童生徒ほど各教科の正答率が高い傾向にあるという指摘もある（文部科学省2018）。このように汎用的能力育成を目指した学習活動は、残念ながら現状ではまだ確立した教育実践とは呼べず、手探りで進められている段階といえよう。

そこで、まず主体的・対話的な学びがどのように展開されるのか考えてみたい。まず、児童の興味・関心を通して学習が展開されなければならないだろう。学習指導要領解説によれば、例えば「総合的な学習の時間」においては、探究的な学習指導のポイントとして、以下のように述べられている。「探究的な見方・考え方」とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用するとともに、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けることであるという（文部科学省2017）。このような学習は、「俯瞰して対象を捉え、探究しながら自己の生き方を問い続ける」という

「総合的な学習の時間」に特有の物事を捉える視点や考え方であるという。

それでは、さらに具体的な授業実践について考えてみよう。児童の興味・関心を把握する方法としては、日頃の日記やスピーチなどの内容から読み取ることが考えられる。また、児童がこれまでの「総合的な学習の時間」の取り組みを振り返る中で、新たな興味・関心が生まれることもある。こうした表現や振り返りの機会を保障することが、児童の興味・関心を把握する上で有効である。例えば、「食の安全」「ゴーヤのカーテン」などの「健康」に興味・関心を抱く児童が複数いることを知った教師が、健康を「総合的な学習の時間」のテーマに設定することもできる（日本生活科・総合的学習教育学会編 2020）。児童は健康というキーワードからイメージしたものを思い思いに書き綴り、その内容を抽出し、表やグラフにまとめる過程で、仲間と健康についてのイメージを共有し、健康的な環境づくりとして「ゴーヤの栽培」、健康食として「そばの栽培」に取り組んだりする。この事例のように、児童がもっている興味・関心を教師が把握し、それを具体的な課題にまで絞り込んでいくことで、価値ある課題を設定することができるという。

### 3) 学級通信による教育活動

これまで見てきたように、児童の興味・関心に基づくアクティブラーニングを保障するためには、教師は何もせずに児童の中に興味・関心が沸き起こるのを待っていればよいわけではない。日常の学校生活における相互コミュニケーションを通して、問題を整理し適切な課題へと導いていくことが求められるのである。そうした視点で、学級通信というツールに注目したい。

学級通信とは、生活綴方教育を土台としながら学級文集から一枚文集という変化を遂げ、現在でも各学級によって多様な形式で発行されている資料といえる。歴史的に見れば、元来、学級通信実践は概して各々の教師の実践から始まったものであり、後に民間教育運動や教育雑誌などの普及を通して、我が国の教師たちに浸透していったものである。木村（2020）は、民間教育研究の機関誌

のレビューや教師たちが残していった各年代の実践記録等を収集し分析を行った結果、学級通信という概念が定着したのは1957年前後であり、当時の教育界の変化として学級づくりや仲間づくりの指導に主眼が置かれるようになったという。その当時、生活綴方教育による授業研究も盛んに行われていた。例えば小学校教師・宮崎典男は、子どもたちに生活綴方を書かせるうちに、教師から要求しなくても、子どもたちがその日の授業を反芻し授業日記を書いてくるようになったという授業実践を残している（豊田 2011）。

現在の学級通信には、様々なタイプの紙面と役割があり、通信づくりの指南書も多数発行されている（浅井 2010・上條 2009）。紙面構成としては、保護者への連絡を目的とした内容や、子どもたちの活動を伝える内容などが多い。一方、子どもたちとの教育活動全般に渡り、学級通信を積極的に活用する実践もある。日本作文の会、会長であった松下義一は、小学校教員時代に学級通信を中心とする教育実践を残している（松下 2010）。松下は「一枚文集と学級通信を兼ね合わせた形の『文集・通信』の体裁で発行してきた。教科や行事の中で、同じ取り組みや体験をしても、そこで学びとったり感じたものは十人十色であれば、一斉に書かせたレポートなどの文章から、子どもたちの多様な考え方や感想を紙面に紹介して読み合ってきた」という。このような学級通信を用いた教育活動に再度光を当てることを通して、近年求められている子ども主体のアクティブラーニングの実践に示唆を得られるのではないだろうか。しかし、学級通信を用いた授業分析という文献は、筆者がこれまで調査した限りでは見合たらない。

## 3. 研究手続き

### 1) 調査対象とその概略

調査対象は、東京都公立 A 小学校、男性 D 先生の 4 年生クラス（児童数 26 名）の授業である。まずはじめに学級通信を活用した授業展開について確認しておきたい。子どもたちは、はじめは学級通信を活用した授業スタイルにまだ慣れておらず、D 先生が求めている観察力や表現力も身に

ついていない。例えば4月の理科の授業では、身近な植物や自然の観察についての話題がD先生の生活経験を基にした情報として学級通信に掲載され、ジェスチャーやユーモア、詩の朗読を交えたパフォーマンスによって、子どもたちに語られている。子どもたちの思考は教室空間を越えて、各々の生活世界を往復したり、詩の世界を楽しんでいるようであり、子どもたちの興味・関心を喚起するような授業展開である。この授業では、授業展開は教師主導的であり、取り上げられる題材も教師によって構成されており、この段階では子どもたちの学習主体性は見られない。

## 2) 調査方法

調査対象の授業として、2009年度4月から1月まで合計で10日の参与観察を行った。朝の会から帰りの会を含め全ての授業について、ビデオ記録とメモによって観察データを記録した。分析では、子どもたちにどのように学習主体性が確立されていくのか、同じ教科の2つの授業を抽出し比較することによって、それらの授業展開がどのように変化していくのかを明らかにする。まず、授業スタイルに慣れてくると思われる6月の授業を分析する。そして、授業スタイルが確立されると思われる1月の授業を中心に分析を行う。

授業記録は、ビデオカメラで記録し授業内の発言を逐語記録にする。D先生は「T」、子どもたちは「S」と表記する。子どもたちの名前は、仮名で表記する。学級通信の文章を読み上げた箇所は斜字体で表記する。以上、授業展開の変化と学級通信の紙面の変化という二つの側面から分析を行うことにする。

## 3) 調査仮説

本稿では、以下の2点を調査仮説として、検証を行っていく。仮説①学級通信を媒体とする授業展開において、子どもたちの授業外活動が活性化されるのではないかと、仮説②授業外の活動として、子どもたちの体験活動や言語活動が活性化することは、学習主体性の確立と言えるのではないかと。

## 4. 結果と考察

### 1) 6月20日の理科の授業

この日の授業は、植物を育てたり観察を行うことで植物の成長について学ぶ授業である。教室にはプランターを設置し、アサガオ、ツルレイシ、フウセンカズラ等のタネが播いてある。これらの植物が窓を覆うように成長を始めている状態である。この授業展開の中で、教室の植物について観察や発問が繰り返され、その後、学級通信No.116号(図1)が配布され、本葉の成長と根の成長の関係を捉えるために、①Tの日記、②Sの日記、③Sの日記を基に、子どもたちの生活経験が発表されていく。さらに学級通信には、授業で学んだことを記録するための④学習用の空欄が用意されており、子どもたちは実際に掘り出された根を観察し、本葉の様子と根の様子を描いていく。それではD先生と子どもたちのコミュニケーションがどのように展開されているのか見てみよう。

この場面では、まず子どもが気付いた2葉目と3葉目の本葉の形の違いについて学級通信が配られ読み上げられる(場面3)。本来は理科の授業で扱う範囲を超えているのだが、子どもたちの経験を中心に展開するD先生の授業では、発展的な学習としてクラスの子どもたちに紹介される。子どもたちが学級通信の文字を熱心に目で追っていくのは、他の友達が発見したおもしろい話題であるためだと考えられる(場面4)。つぎに本葉の変身は植えかえのサインであることが紹介され、教室で育てているツルレイシのグリーンカーテンに対するTの期待が紹介される(場面5・6・7)。そしてTから、学級の日常生活に話題が転換され、さらなる観察視点が提示されると、子どもたちは朝一番に登校してくるのは誰だったかと周りを見回し確認する(場面9・10)。Tはツルレイシの成長の観察ポイントとして、花の付け根に実ができることを伝え、見つけた人は実を持って行ってよいと伝えることで子どもたちの観察意欲を引き出している(場面11・12・13)。最後にTの経験が紹介され、学級で育てているツルレイシの成長と教室内に緑のカーテンができるだろうと期待が述べら



れ、子どもたちもTの話しに聞き入っている(場面14・15・16)。これらの授業の特徴として、子どもの日記報告、それに対するD先生の解説とさらなる課題提示というパターンを読み取ることができる。

この授業で配布された学級通信 No.116 号の紙面構成をみると、4月当初の授業で配布された学級通信と異なり、題材にはD先生からの情報に加えて子どもの日記から発信された情報複数が取り上げられている。そこでは子どもたちの気付きとして子葉から本葉への変化が取り上げられ、D

先生自身の「しぜんのおたより」によるさらなる解説によって説明がなされている。表1の「Tの言動」と「Sの言動」の分量を見れば明らかのように、教師主導的に展開され単に受け答えを繰り返すようなコミュニケーションのように見える。しかし「授業の目的(表1)」として整理したように、コミュニケーションの内容の多くは、子どもたちの日記の報告に基づくものであり、学習に向かう子どもたちの主体性を垣間見ることができよう。

The image shows a collage of handwritten notes and diagrams from a classroom communication sheet. The main title is "本葉は変身していた" (The main leaf had transformed). The date is "6月12日(金)".

Key sections include:

- ①Tの日記**: A student's diary entry about the change in leaves, mentioning "ツルレイシ(ゴキウ)" and "アサガオ".
- ②Sの日記**: A student's diary entry discussing the transformation of leaves.
- ③Sの日記**: Another student's diary entry, mentioning "ツルレイシ" and "アサガオ".
- ④学習用の空欄**: A section for learning, with two circles labeled "〈本葉が出た〉" and "〈本葉が出てない〉".

There are also several diagrams and drawings of leaves, including a large drawing of a leaf with arrows pointing to different parts, and a diagram showing the growth of a leaf from a bud.

At the bottom right, there is a box with the text "小学校4年1組 2009.6.20 No.116" and a large stylized logo "ケルルンクック".

図1. 学級通信「ケルルンクック」No.116号

表 1. 6月20日の授業展開

場面	Tの言動	Sの言動	授業の目的
1		後ろの席に 学級通信を配る	学級通信の 配布
2	すぐさま声に出して読み始める		授業開始の 展開
3	え～それでは、本葉は、変身していた。六月十一日これ本当にゴーヤ？今日、学校に行っ、ゴーヤを見ていたら、どーも家のゴーヤと学校のゴーヤの形がちがうのです！どうしたのでしょうか。家のゴーヤはアサガオの様な子葉ですが、学校の子葉はまんまる・・・僕はアサガオといっしょにゴーヤを育てているから、もしや、ゴーヤの根と、アサガオの根がくっついてしまって、アサガオとゴーヤが一体になってしまった・・・ということなのでしょうか！そうだとしたらアサガオゴーヤとなって、日本全国で種が売られたりしたら・・・でも、ふーむです。まあ、M男くん、そういうことはないようでありますけどね。うんと言う。	学級通信を 目で追う	Sの日記に 基づく 話題の提示
4	え～。本葉は変身する。ずいぶんちがうでしょう！ツルレイシの最初の本葉はこれです。そして次に出てくる本葉は、もう明らかに形が違います。下はアサガオの子葉です。アサガオの場合は、最初の本葉が、このようにもうアサガオの葉っぱというものに、ちかいものになっています。え～。ぼくの「しぜんのおたより」は、実際の葉を1/2に縮小してありますので、本当の大きさは、この二倍になります。M男君は家で育てているゴーヤの子葉と教室のゴーヤの形がちがうと言っています。でも、“まんまる”と言っているのはゴーヤの最初の本葉ではないかと思われるのですが・・・植物は発芽した最初の葉を子葉といいます。そして、その後の葉を本葉と呼ぶのですが、最初の本葉は変身するのです。似ても似つかないでしょう。でも、この変身後の葉は、全て同じ形のもので、もう変身することはありません。ふしぎでしょう？	学級通信を 目で追う	Sの日記への 解説
5	六月十二日葉っぱの変化 今日4時間目の理科で、「ゴーヤが本葉を出した！」をしました。私は、ゴーヤやアサガオの2～3葉目の本葉の（原文ママ）形がちがうのが、おもしろいと思いました。本葉の形がかわるのは、植えかえのサインだそうです。	学級通信を 目で追う	Sの日記に 基づく 話題の継続
6	そうなんです。これは、いいですか。ここで本葉が変身したっていうのはね、実はこれね、植えかえなんです。植えかえてあげましょう。もっと広いところに植えかえてあげましょうってことなんです。と言って板書する。	Tの話聞く	Sの日記に 基づく板書
7	私は、今一番気になっているのは、緑のカーテンです。本当に、できるといいな！		Sの日記に 基づく 話題の継続
8	どうやらできそうですよ。これ。とプランターを指さす。ね。と同意を求める。		情報の共有
9	一番最初にこの教室に、学校に入って来るの誰だ？H男か？Y男か？だいたいあなたが一番か？と質問する。	周りを見回す	情報の確認
10	じゃあ、今度から、もうちょっと大きくなったら、よく見て下さい、とお願いする。あなたが一番最初に入ってくる人が多いようですから。	Y男うなずく	Tからの 観察のお願い
11	花が一番最初に見つけられるか。咲いてるのね。実がなったら誰か一番最初に見つけて下さい。花が終わったところだよ。と手で花の付け根の部分を表すジェスチャーをする。		観察方法の 説明
12	ただし、雄花のところには実はありません。N男、どっちになるんだっけ？と質問する。雌花になるんだよ。	N男話を聞く	説明と確認
13	だから雌花と雄花の咲いた時に区別をよ～く見てると・・・実がなる。はい。一番最初に実を見つけた人は、その実が大きく育ったら持っていきなさい。		観察の提案

14	今年は成長がおそいように思います。二年前の時には天井近くまでつるを伸ばしていました。種まきが一週間ほどおそかったということもあるのですが、このところの不安定なお天気、気温にも原因がありそうな気がします。ろう下側の窓の外の“緑のカーテン”のゴーヤ、ひょうたんなどの伸びも昨年と比べて今一つのような気がしますねえ。つるを伸ばしているものも、茎が細いんですね。う～ん。ちょっと茎があんまり太くなっていかない。教室の方にも緑のカーテンになるようにスズランテープで“タナ”を作りましたよ。	T の話を聞く	説明と確認
15	こういうのをタナと言いますけどね。本当はネット、あるいは支柱、そんな呼び方をします。	T の話を聞く	説明
16	ゴーヤも、ひょうたん、ヘチマ、フウセンカズラはつるを伸ばし始めてはいます。カーテンを作ってくれるといいですが・・・と言ってプランターの方を手で示す。	T の話を聞く	観察の提案
17	さあ、これを見て下さい。え～ゴーヤを引っこ抜くわけにいかなかったんで、この時のために育てていたアサガオを引っこ抜きました」と言って、根っここの付いたアサガオを子どもたちに見せる。	T の話を聞く	話題の転換

## 2) 1月29日の理科の授業

次に1月29日の理科の授業を見てみよう。学級通信を読み上げ、その後、実際に植物の変化を観察するというように、前述の6月の授業と同様の授業展開となっている。子どもたちは12月から始めていたサクラの冬芽観察を行っている。温かい室内で育てて一足早くサクラの花を観察することが出来るように、Tは12月に校庭のソメイヨシノの枝を剪定し、子どもたちに1本ずつ配布していた。そのサクラの冬芽を、子どもたちは各自のペットボトルに水を入れ冬休み中も育てていた。この場面では、学級通信 No.383号(図2)が配布され、①Sの日記、②Sの日記、③Sの日記、④Sの日記、⑤Sの日記を基に授業が展開されていく。学級通信を読み終えると、子どもたちは冬芽の観察を始めスケッチしたり気づいたことをまとめていく。はたして、D先生と子どもたちのコミュニケーションには、どのような変化が見られるであろうか。

この場面は授業の進め方をみても、これまでの授業展開と同じように教師主導型で学級通信が読み上げられながら展開していくが、これまで同様に子どもたちの集中力は高い(場面3)。配布された学級通信には、子どもたちにとっても教師にとってもはじめての体験が掲載されている。それは、子どもたちの育てているサクラの冬芽から、通常とは異なり花が咲く前に葉が出現したという事実についてである(場面4)。子どもたちは、D

先生の読み上げる学級通信に耳を傾けながら、時折、目の前にある自分の冬芽に目を凝らして観察している(場面4)。学級通信には、子どもたち5人の観察記録が掲載されており、各々の観察視点が紹介されている。通常のサクラの生育とは異なり、葉が出現してきた様子が紹介され、Tからもこのような現象は脅威であると解説されることによって、子どもたちは興味深くTの解説に耳を傾け、また自分の冬芽の状態はどうなっているのだろうかかと凝視する(場面5・6・7・8)。さらに他の子どもたちの面白い観察視点が紹介されていく。つぼみを解剖した結果や、つぼみの先端の変化、他の樹木の冬芽との違いに、Tは共感しながら紹介していく(場面10)。これまでと同じように見えるTの授業展開なのであるが、学級通信の紙面構成をみると、5人の日記で紙面のほとんどが構成されており、これまでのようなTの生活経験や情報提供の割合が少なくなっている。つまり、授業プロトコル(表2)だけを見ると、6月の授業同様にTの主導的な授業展開に見えるのだが、学習題材の取り上げ方をみると、まさに子どもたちが自ら調べた学習の記録で埋められているのである。

次に、Tと子どもたちのコミュニケーションに注目してみよう。子どもたちの観察によって収集された樹木の冬芽に関する情報について、実際にTは窓際で育てている何種類もの冬芽を一つ一つ取り上げながら子どもたちと確認していく(場面



11・12・13・14・15・16). これも今までのように進められる観察スタイルであるが、そこには冗談を言い合いながらコミュニケーションを展開する教師と子どもたちの豊かな相互関係を読み取ることができよう。ここでのTと子どもたちの相互コミュニケーションは、子どもたちがTよりわざと先に答えを言ったり、Tもユーモアを交えながら応答している（場面17・18・19・20・21・22・23・24）。冬芽観察の指示を出していく際、冬芽を忘れて持ってこなかった子どもたちには、どのよう

に観察を行うのかと厳しく問い詰めていく場面も見られる（場面25・26・27・28）。しかし、最後まで観察意欲が継続するようにと、Tから校庭のサクラの開花予想が質問される（場面29・30）。この場面で、「先生の予想と一緒にだ」という子どもの発言をユーモアを交えつつ否定するように応答しているが、教室は笑いに包まれる（場面31・32）。これらの学習展開を見ると、6月の授業以上に子どもたちの授業外活動とそれら日記による報告を中心に授業が構成されていると解釈できる。

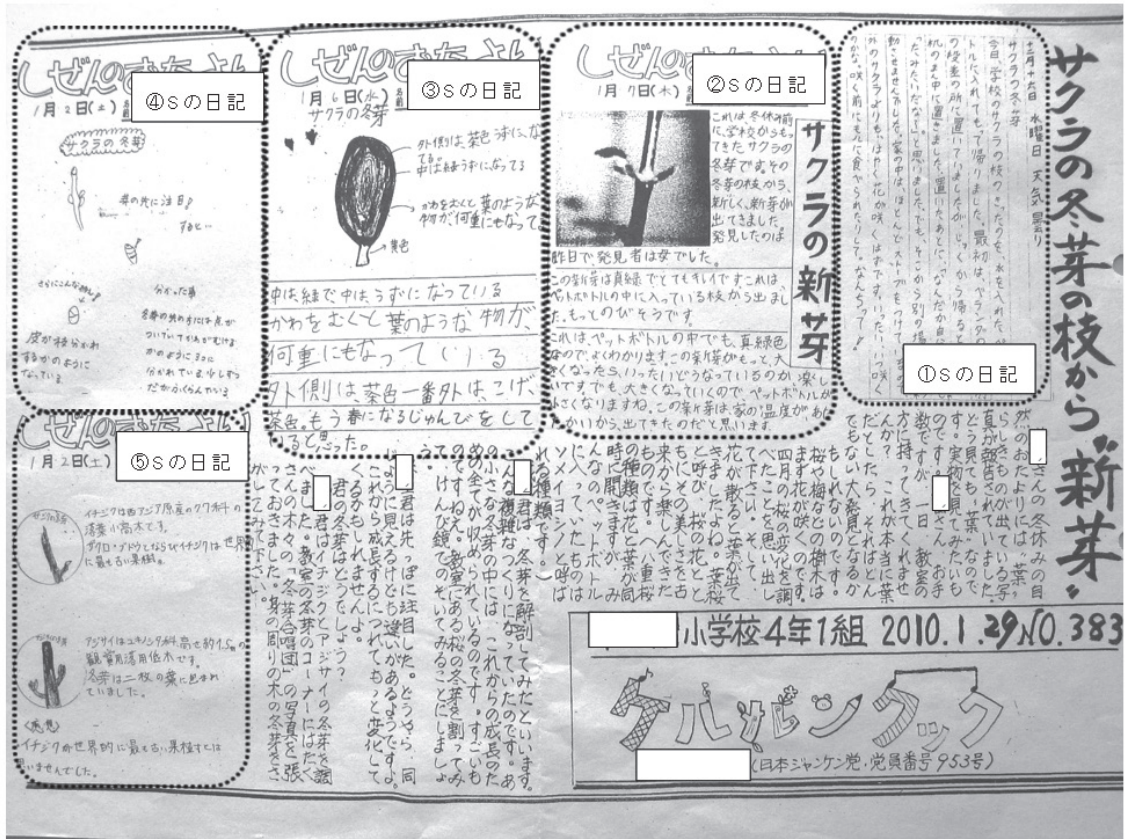


図2. 学級通信「ケルルンクック」No.383



表2. 1月29日の授業展開

場面	Tの言動	Sの言動	授業の目的
1	学級通信を配り始めながら、「冬休みのくしぜんのおたより」でも、何人かの人が冬芽を書いておりますよ」と言う。	自分の冬芽を眺めている	授業開始の展開
2	しかし、これはまあ、脅威ですね、と言って、配り終わる。	通信を後ろの人に配っている	題材の提示
3	サクラの冬芽の枝から新芽、とすぐさま通信の見出しを読み始める。	通信に目をやる	話題の焦点化
4	十二月十六日 水曜日 天気曇り サクラの冬芽 今日、学校のサクラの枝のきったのを、水を入れたペットボトルに入れてもって帰りました。最初は、ベランダの窓の前の段差の所に置いていましたが、じゅくから帰ると、自分の机のまん中に置きました。置いたあとに、「なんだか自分が、死んじゃったみたいだな〜」と思いました。でも、そこから別の場所には移動させませんでした。家の中は、ほとんどストーブをつけているので、外のサクラよりも、はやく花が咲くはずです。いったい、いつ咲くのかな。咲く前にモルにたべられたりして。なんちって!しぜんのおたより 1月7日(水) サクラの新芽 これは、冬休み前に、学校からもってきたサクラの冬芽です。その冬芽の枝から、新しく、新芽がでてきました。発見したのは昨日で発見者は母でした。この新芽はま緑でとてもキレイです。これは、ペットボトルの中に入っている枝から出ました。もつとびそです。これはペットボトルの中でも、真緑色なので、よくわかります。この新芽がもつと、大きくなったら、いったいどうなっているのか、楽しいです。	通信に目をやる時折、自分の冬芽も眺める	Sの日記による新しい情報提示
5	どうなるんだろうね。花が咲くのかどうか。H子さんのもそうだ	Tを見る	Tの疑問の提示
6	でも、大きくなっていくので、ペットボトルが小さくなりますね。この新芽は、家の温度が、あたたかいから、出てきたのだと思います。	通信に目をやる	話題の継続
7	まあ、あたたかいと咲くんですけどね、花が先にね。先生こんなの初めてです、と言う。	自分の冬芽を眺める	Tの経験の提示
8	Mさんの冬休みの自然のおたよりには“葉”らしきものが出ている写真が報告されていました。どう見ても“葉”なのです。実物を見てみたいものです。今日、見せていただきました、と言う。	Tを見る	Tの願いの提示
9	M子さん、お手数ですが、一日、教室の方に持ってきてくれませんか? 今日、持ってきてくれました、と言う。	Tを見る	題材の提示
10	これが本当に葉だとしたら、それはとんでもない大発見となるかもしれないのです。桜や梅などの樹木はまず花が咲くのです。四月の桜の変化を調べたことを思い出して下さい。そして、花が散ると葉が出てきましたよね。葉桜と呼び、桜の花とともにその美しさを古来から楽しんできたものです。(八重桜の種類は花と葉が同時に開きますが、みんなのペットボトルに入っていたものはソメイヨシノと呼ばれる種類です。)C男君は、冬芽を解剖してみたといいます。こんな複雑なつくりになっていたのです。あの小さな冬芽のなかには、これからの成長のための全てが収められているのです。すごいものですねえ。教室にある桜の冬芽を割ってみて、けんび鏡でのぞいてみることにしましょう。K男君は先っぽに注目した。どうやら、同じように見えるけども違いがあるようですよ。これから成長するにつれてもつと変化してくるかもしれませんよ。君の冬芽はどうでしょう? Y男君はイチジクとアジサイの冬芽を調べました。教室の冬芽のコーナーにはたくさんのお木々の「冬芽合唱団」の写真を張っておきました。身の周りの木の冬芽をさがしてみして下さい。	通信を見る	Sの日記による新しい情報提示
11	読み終えてすぐ、窓際に歩いていき、え〜、これカキ、だいぶこの先、緑になってきてます、と指さしながら話し始める。	体を横に向け、先生の方を見る	観察と情報共有
12	これがウメ、もう花が終わっちゃいましたが、ここにね、S男君ちの、これから咲きそうです。		観察と情報共有

13	これボケ，花終わっちゃって，葉っぱが出てきました」と言う。	「ボケ～」とおどけて言う	観察と情報共有
14	これモクレン，な～んか，あ～気持ちいい，と鼻に近付けて言う。	みんな笑う	観察と情報共有
15		A 男「カイの木」と先に言う	観察と情報共有
16	これ，カイの木です。学校の70周年の木ですね。これ，モミジ。ケヤキ。この下に入ってるのは，これね，ホウの木です，と言う。		観察と情報共有
17		A 男「イチョウ」と先に言う	観察と情報共有
18	先に言った子どもを見て笑顔で「イチョウ」と言う。		観察と情報共有
19		A 男「ハクサイ」と先に言う	観察 笑いの共有
20	間違っ言っている子に，叩く真似をする。	みんな笑う	笑いの共有
21	アジサイと言う。	R 男「アジサイはいつ咲くの」と質問する	観察 答えの訂正
22	「え」と言う。	R 男「アジサイ」と言う	観察と情報共有
23	アジサイは梅雨のとき，と答える。		観察と確認
24	そのビー玉，ぶつけると，お前のところにタンコブの花が咲きそうだな，と言う。「これがトンボ」と，置物のトンボを指しておどける。	子どもたち笑う	話題の逸脱 笑いの共有
25	さあ，一体どうなっているんでしょうか。さあ，C 男，このあとどうすんの，と冬芽を家から持ってくるのを忘れた子どもに言う。	C 男「S 男君とあの，R 子さんに見せてもらいます。」	作業指示と注意
26	見せてあげんの，と静かに怖そうな声で言う。	様子を見ている	作業指示と注意
27	やだっよ，と言う。他の子どもを指さし，「見せてあげる子もいないね。どうすんの」と言う。D 子，どうすんの，と言う。	子ども，黙ってる	作業指示と注意
28	3人は，やることないから出て行きなさい，と言う。		注意と叱責
29	では，3月25日に咲くかどうか。先生の予想ではね。ちょっと今，気持ちを集中させて。うるせえ，集中できねえな，と言う。	T を見てる	問題提示 話題の転換
30	カレンダーの方に歩いていき，めくりながら「決めた！学校のサクラ，今ひらめきました」と言って校庭のサクラの方を指さす。黒板の方に戻り，板書しながら「3月19日です」と言う。	H 男「いっしょ」とつぶやく	板書 T の考えの提示
31	なに，いっしょ，と聞き返す。	H 男「僕の予想と同じです」と言う	質問 答えの確認
32	あ～，じゃあ，やめようかな，と残念そうにおどけて言う。	みんな笑う	考えの提示 笑いの共有
33	え～，先生はサクラの葉っぱ（が全て落ちる日）を当てましたよね。君もね。でも（今日は冬芽を持ってきて）ないね，と言う。		過去情報の確認
34	さあ，みなさんは，いつごろ咲くだろうと思いますか。3月19日です。先生はね。では課題。もう一度，スケッチをして下さい。そして前回との違いを明らかにすること，と言って紙を配り始める。		問題提示 観察継続への喚起
35	配りながら，N 君の前回のスケッチを取り上げ，「N 男，お前の冬芽はこんなに細かったか。嘘書いちゃんねえな。うまく書く必要はないけど，嘘はかくなよ」と言う。		観察方法の指示

### 3) 総合考察

以上、6月と1月の2つの授業を分析していくなかで、徐々に子どもたちの授業外活動が活発になり、それに伴い授業内容が子どもたちの活動を起点として展開されることを確認してきた。つまり、これらの授業構成を支えているのは子どもたちの予習なのである。こうした授業は、いわゆる反転授業に似た様式といえよう。反転授業とは、従来、授業内で行われていた内容を授業外で行う様式であり、アクティブラーニングの一つとして期待されているものである(松下2015)。そしてD先生の教育活動において、こうした授業が可能となるのは学級通信がその装置として機能しているためである。

最後にこれまでの検討を基に、前述の調査仮説を検証していこう。仮説①「学級通信を媒体とする授業展開において、子どもたちの授業外活動が活性化されるのではないか」について、子どもたち自身の日記が学級通信に掲載されることは子どもたちにとって最大の評価であり、子どもたちの活動への動機形成がさらに高まることによって、授業外活動への主体的な取り組みが活性化していると解釈できよう。仮説②「授業外の活動として、子どもたちの体験活動や言語活動が活性化することは、学習主体性の確立と言えるのではないか」について、子どもたちの活発な授業外活動とそれら膨大な日記の記録こそ、学習主体性が確立している証拠であると解釈できよう。

### 5. 今後の課題と展望

本稿では、小学校のアクティブラーニング実践の一つとして、学級通信の教育媒体としての有効性を確認することができた。このことは、近年の学級運営の困難さの克服や、新任教員の授業づくりへの示唆を与えるものである。それら実践についての検証も、今後の課題である。

### 引用文献

- 浅井正秀(2010). さあ、学級通信をつくろう 日本標準 2-3.
- 上條晴夫(2009). 学級通信のつくり方アイデア30ぎょうせい 2-3.
- 木村学(2020). 学級通信の起源とその変遷:「日本作文の会」機関紙『作文と教育』の分析を中心に 文京学院大学人間学部紀要 21号, 135-142.
- 松下佳代編(2015). ディープ・アクティブラーニング 勁草書房 43-44.
- 松下義一(2010). 「教室・長編物語」を紡ぐ 第59回全国作文教育研究大会 発表資料 1.
- 文部科学省(2008). 小学校学習指導要領解説 総則編 60-63.
- 文部科学省(2017). 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 114-123.
- 文部科学省(2018). 総合的な学習の時間の成果と課題について 中央教育審議会教育課程部会配布資料
- 日本生活科・総合的学習教育学会編(2020). 生活科・総合的学習辞典 溪水社 118-119.
- 豊田ひさき(2011). 生活綴方教師宮崎典男の授業づくり 一莖書房 140.

(2021.9.29 受稿, 2021.10.26 受理)